

わが国の看護職のカルチュラル・コンピテンスに 関する研究

—潜在特性分析から—

○野地有子、野崎章子

千葉大学大学院看護学研究科

【目的および背景】

外国人患者受入れ等の国際医療交流が国家戦略プロジェクトに位置づけられ推進されており、病院の国際化や看護職のカルチュラル・コンピテンスの能力開発は焦眉の急である。そこで、わが国の看護職のカルチュラル・コンピテンス能力について、日本語版カルチュラル・コンピテンス測定ツール (J-Caffley Cultural Competence in Healthcare Scale) のスコアを用いて、対象集団の潜在的なサブタイプを明らかにすることを目的とした。

【方法】

日本語版カルチュラル・コンピテンス測定ツール (J-Caffley Cultural Competence in Healthcare Scale) を用いた自記式アンケート調査を実施した。CCCHS は2005年に Caffley らにより開発され、日本語版は信頼性と妥当性が検証されている (Noji et al., 2016)。CCCHS は28項目のリカートスケールによる質問から構成されており、回答者の異文化に関する知識、セルフアウェアネス、スキルについて測定する。調査票には、異文化体験等の15項目の質問を追加した。病院の国際化に関する先行研究の中から参加希望のあった19病院の全看護職員を対象とした。無記名の自記式アンケートを看護部に配布回収依頼し、個別シールで封をした封筒にて回収した。実施期間は、平成27年9月～12月であった。研究者の所属大学における倫理審査委員会の承認を得て実施した。分析は、潜在特性分析 (LPA: Latent Profile Analysis) を Mplus 8.0 (Muthen & Muthen, 1998-2017) を用いて実施した。

【結果および方法】

サンプル数は7,494名 (回収率83%) であり、女性91.3%、平均年齢 32.6 ± 9.37 歳、スタッフナース86.9%、CCCHSの平均値は1.85であった。LPAにより、尤度比 (likelihood ratio) $p < .001$ により3つのサブタイプが示された。クラスアサイメントは、タイプ1は39.9%、タイプ2は47.95%、タイプ3は12.1%であった。各タイプのCCCHSの平均値は、タイプ1は1.11-1.73、タイプ2は1.40-2.79、タイプ3は2.42-3.12であった。タイプ1は、海外渡航経験が全く無いか少なく、国際関係論等の受講者が少なく、異文化の人々との出会いの機会が少ない者が多くみられた。タイプ3は、外国人患者を受け持った経験があり、外国人ナースなどとの協働の経験者が多くみられた。わが国の看護職のカルチュラル・コンピテンスのサブタイプが明らかとなり、教育プログラムの開発と評価にいかすことができる。

(本研究は文部科学省科学研究費助成事業基盤研究 (A) 25253107の研究費助成を得て実施した)